400号記念特集号

OMC News 大阪ムービーサークル

OMC事務局　〒565-0085 豊中市上新田4-16-1-33 合原一夫 TEL06-6833-9227
広報編集局　〒573-1171 枚方市三栗1-18-20 前田茂夫 TEL0720-50-5781

平成１１年４月（1999年）Ｎｏ．４００

今年はＯＭＣ創立６０年の年か

会長　合原一夫

このほど有村世話役から古い新聞記事のスクラップを寄せられ、昭和54年（1979）が４０周年だったことが判り、それなら今年は６０周年ではないかとびっくりしました。ＯＭＣニュースが４００号になるという、ひとつの区切りではありますが、クラブの６０周年記念の年というのも大きな区切りの年です。特集として40周年記念の公開映写会を告げる新聞記事と、クラブニュースという形式をととのえた創刊号の写しを掲載しますので、当時をしのんでみては如何でしょうか。当時のことを野村公威さんにお聞きしました。

クラブの創成期は戦前の昭和14年、竹本正光さんという故人が、個人的に同好の人を集めて不定期に会合を開き、16ミリ（村上さん）、８ミリを楽しんでいたようです。その後戦争で中断し、戦後の21年復活、同好の人も増えてクラブとして正式に発足、定期的に会合を持つようになったそうです。その後、玄光社の全国友の会組織にNo.8番のクラブとして加盟、会の名称も「大阪南支部」となり、それが「大阪ムービーサークル」と併称するようになり、略称「ＯＭＣ」が定着、今日では玄光社の全国友の会組織も解散しましたので、「大阪ムービーサークル」略称「ＯＭＣ」が継続しているわけです。戦前、同好の人達が集まって映画作りを楽しみだしてから今年で６０年目、戦後再出発してからも５３年目の年というわけです。

クラブニュースを会報として正式に発行し始めたのが昭和３９年（1964）で、今年４月号で４００号、いずれにしても先人達が営々と築いてきた名門クラブを今後益々盛んに後世に伝えていくのが私たちの務めだと思っております。会員諸氏の一層のご支援ご協力をお願いいたします。

４月例会のお知らせ

４月例会は第４土曜日２４日、18時より阿倍野市民学習センターにて行います。撮影に旅行に、何かと良い季節です。どうか楽しい作品などご持参で月１回の例会にご参集ください。
撮影会の件も説明があります。

３月例会のレポート

桜の便りがきかれる頃というのに花冷えでしょうか、肌寒い例会日、そのせいでもあるまいが6時の定刻で16名程のやや淋しい会員諸氏の集まり、それでも終わってみれば２０名の大台に達していました。作品の方も11本が出て、9時を5分程過ぎるというまずまずの盛会となりました。今月の司会は関さん、書記は合原さん、デッキ係は渡辺さんと奥さん、受付兼照明係は増池さんの役割で進行しました。

■出席者：有村、江村、岡本、奥、金子、関、田中、高田、末岡、華岡、那　須、中尾、松本、前田、宮崎、渡辺、増池、安居夫妻、合原の20氏。

■上映作品（今月の短評担当は合原会長です）

１．尾瀬　　那須典彦さん　　7分14秒

昨年５月に撮影された尾瀬、予想より早く水芭蕉が咲いたとのことで、まだ人の姿が少なく思う存分撮影できたとか。それにしても美しい映像で、７分がもっと観ていたいという気にさせる優れた映像でした。鳥の声の入ったＢＧＭもマッチしていて良かったと思います。人のでるカットが２カ所ありましたが、省いた方が夢幻的な詩情があってよいようです。

２．雪ふる　　江村一郎さん　　5分20秒

びわ湖バレーのロープウエイから撮った雪景色がトップシーンで、JRの窓から走る雪国の情景に続いて近江八幡の町並み、湖北と、雪の降る シーンが展開されます。寒いところでバッテリーに気を使いながら撮影に気を使われたことでしょう。江村映像らしい撮影とカット編集ですが、電車の窓からのシーンは要らないのでは、また電線のうつり込んでいるカットは省いた方がよいのでは等司会から助言がありました。

３．賑わう金剛山　　宮崎紀代子さん　　5分25秒

３年前に撮ったHi8テープを最近まとめられた作品とか。宮崎さんも厳寒の金剛山にケーブルカーで登って撮影されたご苦労様の作品。寒いからといって家にとじこもっていてはこういう作品は生まれません。宮崎さんも編集技術など一作ごとに上達されて先が楽しみな方ですが、もうそろそろ三脚を使用されては如何でしょうか。またタイトルやスーパーインポーズの字が読みづらいとの指摘がありました。ケーブルカーの中の現録は消してＢＧＭだけにした方がよいと思います。

４．二月に春満喫　　安居良枝さん　　4分00秒

梅とか桜は綺麗ですが、映像作品にするには難しいものです。さすが安居良枝さん、大阪城公園の梅という平凡な場所でありながら、ひとひねりしてうまくまとめられていました。車椅子の人、カメラマン等梅観の人を上手にモンタージュして作者なりの「幸せな日本」を演出されました。

5．環状線　　安居利次さん　　9分40秒

同じ大阪にいながら案外ＪＲ環状線のことは知らないもので、この作品を観て勉強させられました。作者は文献などで相当調べられた上でシナリオを書かれたのではないかと思います。環状線のことについて大阪に古くから住んでおられる司会の関さんからも思い出話しが披露されました。今年の映像祭出品候補作品といってもよいでしょう。

6．或る秋祭り　　奥　宏さん　　6分40秒

作者の故郷福岡県豊前市大富神社の祭礼の記録。神事など詳しく記録されていて、相当のコネがあって撮影できたのではないかと推察されるカットも多くありました。こういう記録ものはナレーションが欲しいところです。

そのために時間が長くなっても観る人にとっては長さをそう感じないものです。ご一考の上再構成を試みられたら如何でしょうか。

7．熊野古道　　渡辺雄史さん　　5分00秒

６月第１土・日に予定しているＯＭＣ撮影会のロケハンで撮られた紹介作品。熊野古道のほんの一部を紹介しただけですが、雰囲気を伝えるには十分な映像でした（撮影会については別項で紹介）。

8．名作劇場　　末岡健司さん　　4分00秒

映像による紙芝居、といった作品で、マンガの上手な絵と川柳、格言などをかみ合わせて面白い作品になっています。実写とカットバックしてもお面白いのではないかと司会からの助言がありました。風刺も効いていてよかったと思います。

9．神戸より愛をこめて　　末岡健司さん　　10分00秒

逆回転の神戸まつり、港の風景、給食のボランティア状況、夜の港など、トップシーンのトルコ行進曲などのＢＧＭとともに盛りだくさん出てきます。作者は、神戸は美しい、いい街だ、と伝えたかったのでしょう。しかし残念ながら意図がうまく伝わってこないように思いました。難しいテーマですが、今一度挑戦されては如何でしょうか。

10．究極のマニア　　有村　博さん　　18分22秒

元ＯＭＣ会員で現在は三重県多気郡大台町にお住まいの上野進さんは、ずっと以前から８ミリカメラ、スチールカメラ、映写機など何百台も集めておられてさながらカメラ博物館のよう。 そこへ作者が訪れてインタビュー形式で撮影してこられました。相手と会話しながらの撮影はさすが有村さんならではの芸当です。世の中にはいろんな人が居るものです。スチールカメラのシーンが長いのでカットバック的に扱い、話題性の強いものだけを重点的に紹介されてもう少し短くしてもよいのではと思いました。

11. たのしいフィットネス　　華岡　汪さん　　6分40秒

華岡さんもお若いですねえ。若い人に混じってフィットネスクラブで汗を流しておられる様子を奥さんが撮られたのでしょうか、よく情景が伝わってきました。後半はクラブ員によるハイキングの様子ですが、前半とガラリとムードが違うので、トップシーンに皆を紹介してこんな仲間がフィットネスクラブで一緒に汗を流しているのだ、といった方がつながりが良いように思いました。久々の華岡作品でした。

13. ちょっとフライト　　岡本至弘さん　　16分00秒

会員の田中正文さんは軽飛行機を操縦するのが趣味という方ですが、その田中さんに密着して八尾空港から高知空港までの往復フライトを記録したもの。飛び立つ前の飛行プランなど丁寧に撮られています。この記録映像を「作品」にするには、やはり田中さんの日常生活や飛行機に乗るようになったいきさつとか生き甲斐といった脇の話を固めないと奥行きのある作品にはなり得ないように思いました。再度挑戦してみてください。

14. 第一小学校餅つき大会　　高田淳吉さん　　6分00秒

小学生らを混えて餅つき大会の様子を楽しく描いておられます。子供らが搗きたての餅をほほばるカットなども、うまくとらえられていて暖かみのある記録作品となっています。肩載せの業務用カメラで画質も抜群のものがありました。

以上で上映も終わり9時を若干過ぎたところで、いつもの通り喫茶組と一杯組に分かれて二次会へと席を移しました。

■前田茂夫氏がインターネット・ホームページコンテストでグランプリ

インターネットのことはよく知らなかったのですが、コンテストも全国規模で行われているようです。このほど前田さんがＣＡＴＶインターネット・ホームページコンテスト'９９でグランプリ（郵政大臣賞及び協議会会長賞）を受賞され、4月23日に東京で授賞式があるとか。とにかくお目出度うございます。（ホームページのタイトルは「ＳＬ讃歌」とのこと）。　　合原記

■大阪市視聴覚教材コンテストに安居夫妻がそろって入賞

安居利次さん　　特選　「平野の歴史的考察」
安居良枝さん　　入選　「南禅寺散策」　　お目出度うございます。

■撮影会は６月５日(土)～６日(日)、熊野古道をテーマに行います

撮影会の目的の一つは、会員相互の親睦と、同じ場所へ同じ時に行って作品をつくっても、人それぞれの個性や感性によって十人十色の作品が生まれ、それらを観ることで大変勉強になり腕前もあがる、といった点にあると考えます。また個人では撮れないものもグループなら出来る、ということもあります。別紙ご案内の通り企画しましたので是非ご参加を。

（ＯＭＣニュース４００号記念に寄せて　平成１１年４月）

ＯＭＣニュース・４００号記念に想う　　関　剛

私がＯＭＣに入会させてもらったのは会が発足して数か月後の昭和４１年、もうずいぶん昔のことになる。当時はＣＦＣ・小型映画友の会大阪南支部と称し、阿倍野警察署前の露地を東に入った医師会館の会議室を借りて例会を開いていた。

会長は竹本正光さん、顧問は札本映光さん、世話役に岡本好雄さん（この三人はナクサご出身）それに川畑健二さん、西浦栄次さんなど。すでに故人になられた方々だが会員の作品レベル向上についてはことのほか情熱的。月に一二度は各世話役自らそれぞれ自分流の資料や機材を会場に運び入れて「８ミリ映画講習会」を開くなど例会はいつも和やかで活気に満ちていた。

初期の会報はＢ５版の三つ折り仕様。当然ワープロなどあるわけがなく、すべて手書きのガリ版刷り。何年かあとに和文タイプライターの体裁になったと記憶するが、いずれにしても出版する側のご苦労はたいへんなもの。商業美術の工房を経営していた川畑さんがお仕事の傍ら一手に引き受けておられたのだと思う。

月刊で４００号と言えば実に３３年以上の長期にわたって一度も欠かさず続けてきたことになる。映像クラブはもちろん世の中のさまざまな自主運営のサークルがそれぞれ独自の機関誌を発行しているが、これほど価値ある歴史を誇れるものは少ないだろう。

その後ＣＦＣ組織の母体である小型映画誌の廃刊で全国的な交流の場が縮小され、これを機に名称を「ＯＭＣ・大阪ムービーサークル」に改めた。この間、会長は竹本さんから川畑さん、小倉さん、そして合原さんへと引き継がれてきたが、そのどなたも指導者として相応しい器量の持ち主であり、なにより人の和を第一に掲げる方々。ＯＭＣがいまなお躍進を続け健全な活動ができるのも、こうした偉大な先人たちと歴代指導者の身を削るような努力の積み重ねがあったからにほかならない。

しかし今は当時を知る人もほとんど居なくなり、我々をとりまく環境もすっかり様がわりした。会員の約半数が初めてビデオでこの世界に足を踏み入れた人たち。８ミリ映画に携わった経験はなく、カメラはもちろん編集機材や映写方法までなにひとつ共通するものはない。当然ながら作品の傾向や制作についての考え方も変ってきた。

マイク片手にリポーターがカメラに向かってしゃべり、或いは作者自身が撮影しながら対象人物から話を引きだすなどは録音機能が劣る８ミリ映画に見られなかった表現方法。テレビの影響からくるところが大きいと思うが、アマチュア作品の主流がビデオにとって変わった現在、これも一つの表現手段として当たり前と言うべきか。

これは私的意見だが、テレビ局などプロはその制作にあたって、監督、カメラ、マイク、録画、その他雑用も含め、数人から十数人の専門職で行動する。そして何よりお金をかける。アマチュアがどれだけプロの手法を真似ても彼らを上まわる作品は到底望めない。

作品をつくるからにはできるだけ多くの人に見てもらいたい。毎年発表会を開催するのはその欲望を満たすのが目的だ。しかしそこでテレビの亜流的作品ばかりを見せても目の肥えた観客は決して納得しないだろう。先日人から聞いた「しんどいが、どれも短いのでまぁなんとか辛抱できる」などの評は私たちにとってたいへん屈辱的である。

営利を目的とするプロが安易に踏み込まない分野、それは８ミリ時代から創作の指標として常に私が求めてきたものだ。いまだに満足する作品に至っていないが、「プロの摸倣に走らない」こと。私のこの主義は決して今後も変わることはない。

ＯＭＣニュース４００号記念に投稿するにあたり、私の考えるところを披露してみた。

私とＯＭＣ　　**有村　博**

私がＯＭＣに入会したのは1968年10月18日、その日、朝日生命ホールでは初めての、第８回ＯＭＣ８ミリフェアーが開かれており、その会場での事でした。雑誌「ビデオサロン」の前身「小型映画」の友の会大阪南支部でもあったＯＭＣの事は雑誌社への問い合わせで知り、当時の会長川畑健二さんにお目にかかったのがきっかけでした。あの小さな８ミリの画面が商業映画並みに拡大映写され、その音響とともに未だに忘れられない記憶として残っています。

翌月からは上六の府教育会館の一室での例会に出席し、子供の成長記録などを出品し皆さんから色々とアドバイスを頂戴し、それ迄知らなかった映像体験に、今から思えば無我夢中の月日だったようです。そして翌年の朝日生命ホールでの映写会には、私の二人の息子がアメリカより先に月に到達してゴジラに会うといった空想科学映画？「マーくんの宇宙旅行」が上映されました。この作品は後に小型映画増刊号でそのメーキングが写真入りで１頁にわたり紹介されました。

それ以来、平成９年に映写会場がアベノに移る迄の29年間の朝日生命ホール上映会に27本の出品を成し遂げたのも懐かしい思い出です。そして色々と助言をその都度頂いたお仲間の皆さん、中でも私の先生、川畑さんには大変お世話になり、カットの長さ、入れ替えなど、お宅での再三に亘るご助言のもとに完成しました「煙の挽歌」が千数百本の応募作品の中からキャノンコンの最高賞に選ばれた事は、特筆に値する事柄と思っています。その後、全関西８ミリコン・グランプリ、歌謡曲８ミリコン・金賞、大阪ビデオコン・大賞等々沢山の賞を頂戴出来たのも総てＯＭＣ在席のおかげであると確信しています。

1979（昭和54）年にはＯＭＣを中心に「やってみませんか〈遊び入門〉８ミリ映画」と題した特集を毎週１回、合計17回もディリースポーツ新聞の文化欄で連載し、映像創作の楽しさをアピールさせて頂いたのも思い出の一つです。

映像作品には色んな見方があります。川畑さんの持論でもあった「10人の人が見て、8～9人までが良いという作品こそ本当に良いものです。」これが多数決で総てを決定するＯＭＣの伝統として残っているのです。私の人生で最も楽しく誇らしいクラブＯＭＣをどうか今後ともよろしくお引き立てのほど、お願いします。

私とＯＭＣの絆

合原　一夫

私がこのＯＭＣに入会したのは、今からおよそ２８年前の昭和４６年です。当時私は東京から万博工事のために大阪へ転勤しスイス館やニュージーランド館、コダック館、モルモン館など多くのパビリオン建設に携わっていた関係で、８ミリも随分記録として撮影していたものです。その作品のひとつに「ツリーの最後」があり全国コンに入賞したのが８ミリへの病みつきの始めですが、同年に東海テレビの募集した全国コンで「ベランダ」が入賞し、その授賞式の帰りの新幹線の中で、川畑健二さん（元ＯＭＣ会長）にＯＭＣに入会を勧誘されたのがＯＭＣ入会のきっかけでした。川畑さんは同じコンテストで「物語り」という作品でグランプリをとっておられました。当時スーパー８やシングル８が出現し、８ミリ全盛時代の始まりでした。ＯＭＣにはいろんなベテランが居り、私など新米は月例賞をとるのも難しいほどでした。

川畑さんはドラマやドキュメンタリーが得意な方で、撮影会で撮った映像をもとに自分なりにドラマ仕立てで創作され数々の名作をモノにしておられました。またよく教えてもらいましたが、惜しくも昭和62年暮れに故人となられました。

その後。小倉宝蔵さんが会長になられＯＭＣを引張ってこられましたが、氏も世話好きで会報のワープロ打ちや発送、公開映写会のプログラム作成、例会会場のお世話など実にこまめに動いておられました。この小倉さんも他界され、その後を私が引継ぐことになりましたが、前任者達が名会長ぶりを発揮されていたので大変荷の重い役を引き受けたものと家内からも叱られたものです。時はフィルム時代からビデオ時代に移行しつつある過度期にありました。他のクラブはビデオを中心に賑やかにやっているのに、ＯＭＣはかなり後までフィルムにこだわっていたため、例会での出席者数や出品本数が次第に減ってきて、会員減と共に会の運営そのものが危ぶまれる事態になったこともあります。一時年会費も２万円という異常に高い時期もありました。

小倉前会長が亡くなられたのを契機にホテル・アウィーナから会場費の安い現在の阿倍野市民学習センターへと会場を移し、８ミリフィルムの上映も断念してビデオ作品のみに衣更えして今日までやってきました。

幸いその後玄光社のビデオサロン等を通じてＯＭＣの存在を第三者にアピールすることで会員数も増え、例会作品も10本を超す盛会になりました。今後とも末永くＯＭＣ隆盛を祈念したいものです。

入会して２５年の思い出

前田　茂夫

昭和４９年１２月にＯＭＣに入会しましたので、２５年間お世話になったことになります。入会前は千葉の船橋市に住んでたことから、当時お世話になっていた東京のクラブの会長の一人（近藤幹太さん）に転勤の挨拶に行くと、大阪には某大物会長もいますが、作風が非常に抽象すぎるので前田さんに合わないでしょうといって川畑健二ＯＭＣ会長を紹介してくれました。

このような経緯で入会した当時は、フィルム映像の全盛時代で、会員も多士済々でした。川畑会長はヒューマンドキュメンタリーを最も得意として数多くの優れた作品を制作しておられたので、非常にその影響を受けました。この時代の思い出はいろいろありますが、やはり一番の出来事は「紙漉き五十年」が昭和５６年のキャノンコンテストのグランプリに入賞したことでした。

この作品も最終の段階で川畑会長にナレーション原稿の手直しなどの助言を頂き、受賞できたものと感謝しております。この当時ＯＭＣから３年連続してキャノンコンテストのグランプリ作家が誕生したということから、「出会い」の川畑さん、「煙りの挽歌」の有村さんと、「紙漉き五十年」の私の３人のキャノンコン・グランプリ作家の対談が当時の小型映画誌に掲載されたこともありました。それからも幾つかの賞をもらいましたが、いずれもヒューマンドキュメンタリー作品で、川畑さんの影響を受けて教わった作品ばかりです。このように川畑さんは誰が観ても共感を受けるオーソドックスな作風で、大きな存在感のある会長でした。

その後のフィルム映像からビデオ映像への転換の経緯は、皆様ご承知のとおりですが、多くのアマチュア映像作家の方々の１本の作品制作に取組む姿勢は、フィルム時代は作品の企画から制作まで、たっぷり時間をかけて本当に真剣に取組んでいたのに対して、ビデオになってからは何かしら安易に流れてしまっているのではなかろうかという気がしてなりません。最近はどこのビデオ映写会に行っても、生活にまで踏み込んだヒューマンドキュメンタリー作品を観賞する機会が非常に少なくなりました。これもその表れではないかと思っています。従ってあの当時の作品の方がはるかに質が高く、感動を覚える作品が多かったのではないでしょうか。このように思うのは私だけでしょうか。

お断り：岡本至弘さんからも原稿を送って頂きましたが、
印刷後でしたので来月号に掲載します。

みんなでそろって撮影会にいこう！

ＯＭＣ　'９９年度の撮影会がきまりました。
　　できるだけ多くの参加をもとめます。

日　程　　６月５日(土)６日(日)　一泊二日
場所　　和歌山県西牟婁郡上富田町、中辺路町一帯の熊野古道
宿泊　　「ビラ・ジョイア」　民宿サカイ
　　上富田町朝来里田　TEL　0739-47-3750
参加費　２万円（予想）ただしＪＲ運賃、昼食代は含みません。

今年は４月２９日から和歌山県全域で「南紀熊野体験博」が開催されます。その一部に便乗し、熊野古道で平安期の旅の衣裳を着た美しい女性を配して、簡単な脚本を基に幻想的なドラマを撮影することになりました。ただ脚本に添った撮影は全員同じような作品になるおそれがありますので、脚本作成の段階で作者それぞれの個性が発揮できる余地を多く残すことに配慮しました。ドラマが初めての方には場面ごとにアドバイスをしますのでご安心ください。

南紀地方の道路整備はまだ不完全で、期間中の土曜日曜はとくに混雑が予想されます。少し高くつきますが白浜まで電車で行き、そこからレンタカーで移動するのが最善かと思われます。これにはＪＲのレール＆レンタカー割引制度があり、天王寺－白浜間特急券とも往復で通常料金より２１５０円安くなります。ただし１０人乗りの車ですから割引乗車券も１０人まで。申し込みのあった方から順に割り当てますのでご承知ください。　　申し込みは４月例会で受け付けます。参加したいが例会に出席できない方は、なるべく例会日までに合原会長までお知らせください。

撮影会は会員の親睦を深めるのがもう一つの目的であり、ドラマ制作はカットつなぎのタイミングやモンタージュ技法など、風景作品では得られない高度の撮影編集技術が学べる場でもあります。
残念ながら一部に撮影会を否定する発言があったように聞きました。ＯＭＣが６０年の歴史を誇れるのも会の和があってこそです。私どもの趣旨をご理解ください。